

クマサルボウについて

長崎県総合水産試験場
種苗開発科

クマサルボウとは

クマサルボウは、アカガイの仲間の大型2枚貝で、大きいものは殻長が10cm、殻重が300gを超えます。有明海と瀬戸内海のみで漁獲される特産種で、水深5～20mの砂泥底に生息しています。

形はアカガイに似ていますが、殻の脹らみが大きく、殻の縁も肩を張ったように張り出しています。また、殻の表面の溝(放射肋)の数がアカガイが42本前後であるのに対してクマサルボウは38本前後と少なく、殻をクマの毛皮のような黒く厚いピロード状の皮(殻皮)で覆っているのが大きな特徴です(図1)。



図1 クマサルボウ親貝(スケール5cm)

近年の状況

クマサルボウは、かつては有明海に豊富に生息していました。当時を知っている漁師さんに聞くと、海底を埋め尽くすように居たと言うことです。豊富な資源量を誇っていた時代はアカガイの代用品として取り引きされていましたが、現在では漁獲として記録が残らないくらい減ってしまい、非常に高価な貝となってしまいました。同様に瀬戸内海でも、クマサルボウは今や幻の貝となっています。ちなみにアカガイの代用品と書きましたが、アカガイに比べて肉質の色が少し薄いだけで、味の方はクマサルボウの方が歯ごたえがよくおいしいとのこと。

今年の冬から春にかけて、諫早湾の広い範囲で、関係漁協の漁師さんたちによる海底清掃が行われました。その際に混獲されたクマサルボウは、水試

が行う種苗生産実験用として提供していただきましたが、広い諫早湾を何日も繰り返し網を曳いて獲れたのは、わずか100個体程度でした。このことから、クマサルボウの資源量がどれほど減ってしまっているかが容易に想像できます。

クマサルボウの種苗生産

水試では、クマサルボウ資源を増やそうと、3年前から種苗生産実験に取り組んでいます。クマサルボウは0.06mm程度の小さな卵を産んで増えます。大きな母貝になると1億個近くの卵を産みます。卵は半日ほどでふ化し、ふ化した子供は1日も経つと自分で餌(植物プランクトン)を食べようになります(図2,1～3)。この時代を浮遊幼生期と呼びます。浮遊幼生は約3週間で5倍の大きさに成長し、(図2,4～6)。変態して海底の貝殻などにくっつき、その後は徐々に成長して図1のようなクマサルボウの姿になります(図3,1～2)。

種苗生産に取り組んだ当初は、親貝が思うように入手できず、また、浮遊幼生期の減耗が大きいためになかなか思いどおりに進みませんでした。今年、海底清掃のおかげで親貝が集まったことと、浮遊幼生期の餌となる植物プランクトンの種類を検討することで数万個オーダーの稚貝ができるようになりました。また、親貝を温度コントロールして飼育することで、産卵期とされる7月下旬よりも2ヶ月以上早く卵を産ませることに成功しました。

今後の課題

今年、餌を中心に改良を重ね、今まで問題となっていた浮遊幼生期の減耗を克服しました。しかし浮遊幼生から稚貝に変態して着底する率が不安定であるという課題が残りました。水試で飼育した着底直前の浮遊幼生の大きさを他県の成功事例と比較すると小型であることから、この原因は、成長に必要な餌の質に関係があるのではないかと考えています。

不思議なことに、近縁種のアカガイではこのよう

な問題は発生していません。研究担当者としては、クマサルボウが子供の頃に特別に豊富な栄養を必要とする貝で、そのことが、有明海のような栄養豊富な海にしか生息しない理由ではないかと思っています。

今後は、残された課題を克服して、できるだけ早く種苗生産技術を確立し、かつてのような豊富な資源を回復させる一助にしたいと考えております。

(担当 大橋智志)

図2 クマサルボウ浮遊幼生(スケール0.1mm)

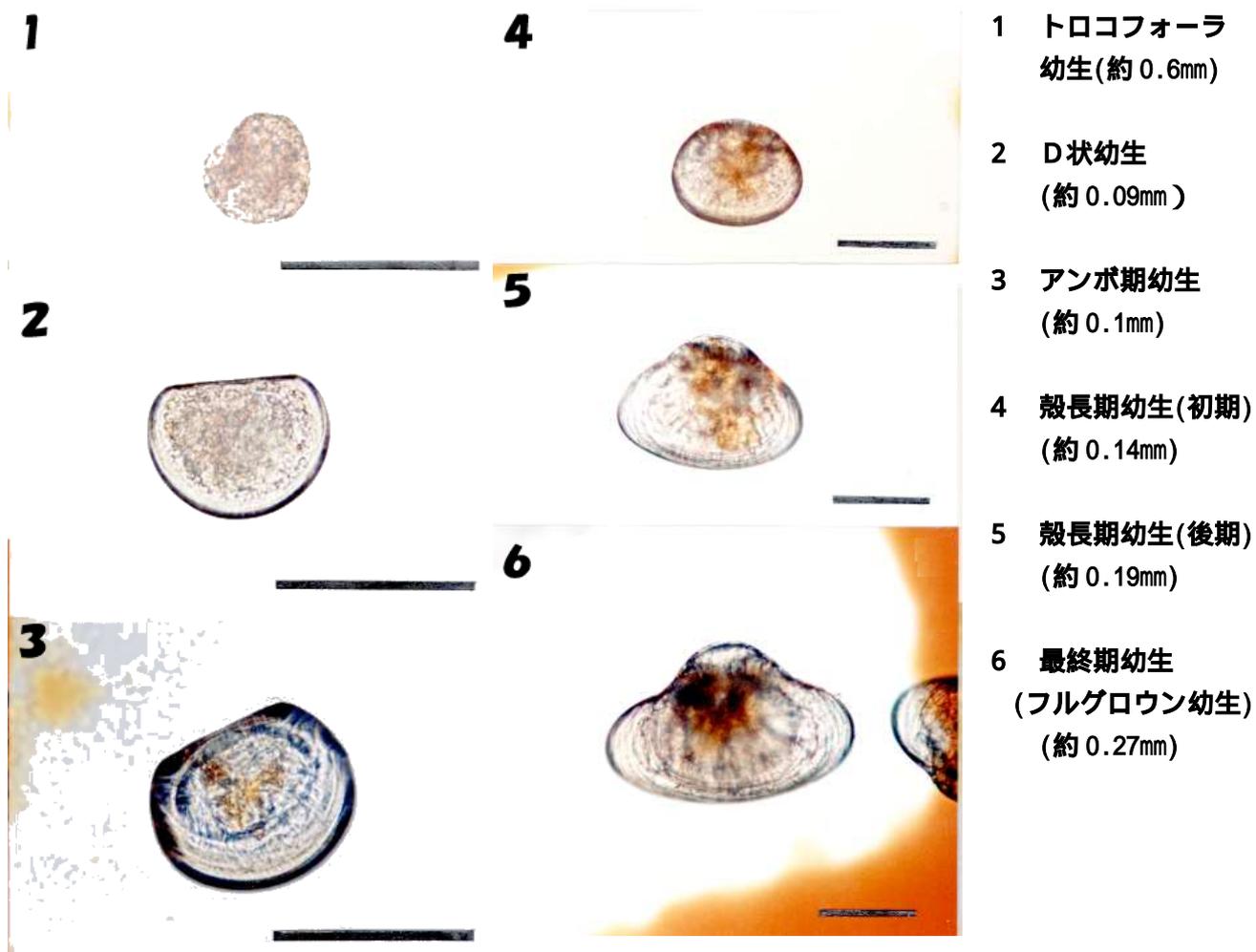


図3 クマサルボウ稚貝(スケールは1cm)

1 初期稚貝(殻長約5mm)



2 1歳の稚貝(殻長約30mm)

